

▶▶▶▶▶▶▶▶ UP DATE ◀◀◀◀◀◀◀◀

■第38回理事会を開催

6月8日海運クラブ（東京・平河町）において理事会を開催した。第17回通常総会資料について平成17年度事業報告および決算に関する件と平成18年度事業計画および予算に関する件が審議承認された。役員選任の件では、事務局が提出した役員選任予定者案を審議し承認され、総会の決議事項として付議された。



■第17回通常総会および懇親会を開催

6月8日海運クラブ（東京・平河町）において第17回通常総会および懇親会を開催した。

総会では、第1号議案で平成17年度の事業報告と決算報告、第2号議案で平成18年度の事業計画と予算をそれぞれ原案通り可決承認された。

理事会で総会決議事項として付議された役員選任案に関して、横山知章理事（東京ガス(株)パイプライン技術センター所長）から渡辺孝仁氏（東京ガス(株)パイプライン技術センター所長）へ交代される件、渡邊隆理事（東京工業大学名誉教授）退任に伴い、新たに田中和博氏（日本大学理工学部土木学科教授）の理事就任の件を原案通り可決承認された。

また、7月4日開催予定の第13回非開削技術講演会では「アジア非開削事業の現状と課題」と題し石川副会長をコーディネータにインド関連を東京設計事務所の宮本氏、マレーシア関連をエヌジェーエス・コンサルタツの落合氏、台湾関連をアルファシビルエンジニアリングの酒井氏、中国・上海関連を奥村機械製作の筒井氏をパネラーとしてパネルディスカッションを計画していること。10月29日からNo-Dig2006ブリス

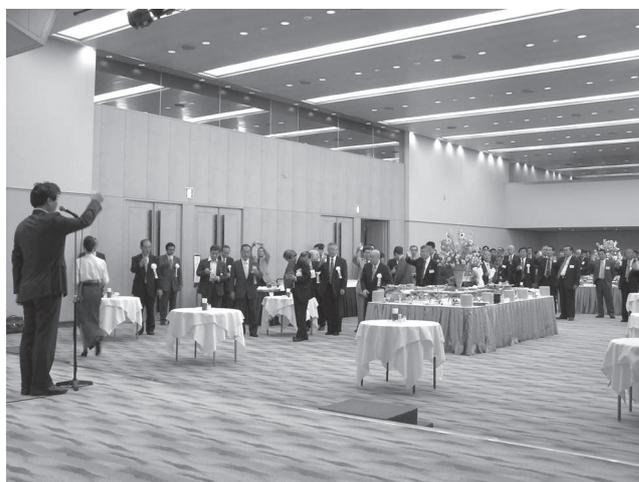
ベンが開催されるが、JSTTにおいて視察調査団を組織するので会員の積極的な参加を希望すると呼びかけた。

特別講演では、昭和大学医学部第二外科学教室の草野満夫教授を招き「患者に優しい手術，地球に優しい非開削技術」というテーマで講演をいただいた。患者にやさしい手術とは、患者の精神的，肉体的な負担を軽減することができる，内視鏡を使用した手術のことである。内視鏡を使った手術で，人体を地球に見立て，非開削技術が地球にやさしい技術であることを，自宅付近の中原街道の道路工事による渋滞を引き合いに出したり，ユーモアたっぷりにご講演をいただいた。

懇親会には国土交通省から栗原下水道事業課長ほか，安中下水道協会理事長など官公庁や関連団体など多くの来賓を迎えた。冒頭，松井会長から「今年は



総会であいさつする松井会長



乾杯のご発声をする栗原国土交通省下水道事業課長

オーストラリアのNo-Dig2006ブリスベーンが開催される。最近の非開削のアジアマーケットは拡大傾向にある。国内ばかりではなくアジアのマーケットにも目を向けるのも一つの事業展開だろう。是非ともNo-Digブリスベーンに積極的に参加しアジア進出の足がかりにしてほしい。」とあいさつした。つづいて来賓として国土交通省から栗原下水道事業課長が「都市においての下水道を含めた管渠システムの再構築には、非開削技術が欠かせない。みなさまの活躍の場は大いにあるだろう」と会員各社を激励し乾杯のご発声をされ、来賓とともに懇親を深めた。

■ CSSTT（中国・上海非開削技術協会）

ZHANG 副会長が来日

5月27日CSSTTのZHANG副会長が、上海市公路学会副秘書長LU氏とともに来日し、JSTTと交流もった。3月に開催されたトレンチレスアジア2006上海においてCSSTTのGON副会長兼秘書長と会談し、双方の技術や情報交流の協力体制の確認したところ。今回はZHANG副会長が上海市市政工程管理局副局長の立場で、大阪で開催された高速道路の高度利用に関する会議に出席するための来日だったが、松井会長に会うためZHANG副会長が東京まで足を伸ばしたため会談が実現したもの。

ZHANG副会長は、「中国全土での高速道路は現在延4万kmあり、年間約5～6千kmが建設されている。上海市においては、10年前、100km程度だった高速道路が現在は8倍以上の860kmが整備されている。中国では高速道路下を利用した、ライフラインの埋設施工には、非開削が欠かせない技術として認知されつつある」と説明があった。

さらに日本と中国・上海の非開削技術の現状について情報交換を行い、今後の日中の非開削技術協会の友好と盛んな技術交流を約束し、和やかに雰囲気会で会談が終了した。



左からLU氏、ZHANG氏、松井会長、森田事務局長

編集委員リレー執筆コーナー

小幡 弘喜

OBATA Hiraki
株式会社協和エクスオ 顧問



私がJSTTと係りを持ったのは協会設立当初の平成元年に通信関係の代表として参加させて頂いたのがきっかけです。当時は通信分野においても非開削による大型ケーブル收容設備のトンネルや小口径推進機を用いた通信設備の建設が盛んに行われていました。しばらくするとメタルケーブルに変わり、細いケーブルで大容量の情報伝送が可能な光ケーブルの発達によりそれまでの大きな設備が不要となったことで、いまでは新規設備の建設は激減しています。ただし通信分野においては下水道と比較して設備に与える劣化への影響は少ないものの、ネットワーク等生命線としての情報通信の利用が高まる中、大都市では老朽化した大型收容設備も多いことから、今後は維持管理の重要性が問われると考えています。

編集委員においては創刊号である平成4年から担当しています。まだまだ現役と思っていたものの、ふと廻りを見渡すと当時の担当者はいなく、いつの間にか最長老となってしまう寂しさを感じる反面、若き者たちの活力を感じ、編集課程を通じて非開削技術がこれからも大きく飛躍する予感さえします。

本誌は2003年10月号からは、コンセプトとして（それまでの会員サービスとしての【世界の最先端・高度化技術を追求める非開削技術】から）外に向けての情報発信誌としての【道路を掘らない技がここにある、環境にやさしい非開削技術】に編集方針を切替え、新技術や確立された技術の更なる普及を目的とし、会員方々の技術を多方面で紹介する広報誌になるような記事掲載に取組んでいます。また、編集体制も非開削技術に携わる各分野の一戦で活躍されている小委員による企画構成に変更した結果、読者への興味深い情報提供が行えるようになったと思っております。

建設事業、特に土木については非常に厳しい環境に置かれている現在ではありますが、編集委員の長老として、これまでの経験を上手に変革時代にマッチさせ後輩の皆様への助言ができるよう努力し、非開削技術の益々の発展ができるような季刊誌にしてゆきたいと思っています。